
おはぎ

R o b i n

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おはぎ

【Nコード】

N3034F

【作者名】

R o b b i n

【あらすじ】

人間に不信感を抱いている主人公の歩。それゆえ深い人間関係は避けていた。しかし、友達の彼女である恵梨奈に興味を抱いた。それを否定しながらも、止まらない気持ち。それが愛だとわかった歩のその後は？また、歩の愛の最後の形は？

第一話（前書き）

どういつ結末になるか楽しみにして待つて頂けると嬉しいです。

第一話

ベッドから起き上がり、煙草に火を点けた。さっきまで抱き合っていた女が、抱き着いてきた。うつとうしく思いながらも、そのまま煙草を吸い続けた。煙草を吸い終わる頃、女が話しかけてきた。

「泊まってもいい？」

「俺もその方が嬉しいよ。」

そう答えると、飲み物を取ってくるのを理由にし、抱き着かれている体を話した。水を持ってベッドに戻ると、また女が抱き着いてきた。

「歩、大好きだよ。」

「俺も好きだよ。」

そう答え、軽いキスをした。こんな嘘に心苦しさを覚えてしまった。あいつはこのことを喜んでくれているのだろうか。そんな考えがよぎって、この女を尚更うつとうしく感じたが、帰れとは言えなかった。

どうしたら忘れることができるのだろう。いや、どうしたら…。

俺のルックスは中の下くらいだと思う。でも不思議と女に困ったことがない。色んなタイプの女と付き合ったが、本気で惚れたこ

とはなかった。いや、俺は人間というものを信じてないから、これからもない。そんな俺でも最低限のルールはある。

一つ、他の女の影は見せず、惚れている振りをする。

二つ、別れたくなれば相手に振らせる。

三つ、友達の彼女や彼女の友達には手を出さない。

人に疲れた俺が、他人にしてやれる最高点の優しさだ。

あつ、ちなみに女とやりたいだけじゃない。そういう時期もあったけど、今は違う。

俺には深い友達もいなくなった。これから作る気もない。

現在は三股中です。今日は晶子という二つ年上の女とデートする予定だ。

その晶子とのデートで、カラオケに行くことになった。近所のカラオケボックスに入ると、受付に見知った顔の男と彼女らしき女がいた。

「もしかして信広じゃない？」

「えっ、歩か？久しぶりじゃん。今何してんの？」

「真面目な大学生よ。お前は何してんの？」

「俺はしがない浪人生よ。そこの予備校でな。」

目の前にある有名予備校を指差しながら言った。

「お前が浪人って、医学部でも目指してんの？」

信広とは小・中と塾が一緒だった。小さな塾だったが、俺といつとも一番を争っていた。頭のレベルもそうだが、女遊びや悪さも一緒

にしていた。

「まあな。」

どうやら相変わらず学力をキープしていたらしい。

「あの信広が医者ねえ。お前のいる病院にだけは行きたくないよ。」

「アハハハ、俺もそう思うよ。」

「横にいるかわいい子は彼女？」

「そう、恵梨奈。こいつは俺の友達の歩。」

どうやら相変わらず勉強以外も忙しく過ごしているようだ。

「初めまして。恵梨奈です。」

恵梨奈が俺達に話しかけてきた。明らかに年下に見えたけど、顔もかわいいし、感じのいい子だと思った。信広の彼女にしては、恋愛に慣れた風には見えなかった。

「初めまして。こっちは晶子。」

「初めまして。」

一通り挨拶が終わると、信広が聞いてきた。

「どうせだったら一緒にどう？」

晶子是不満そうだったが、俺はその提案を受け入れることにした。普段ならこういう時は断るはずなのだが、その時は何故か断らなかった。

恵梨奈という子は歌も上手く明るかったし、信広は盛り上げ上手なので、皆が楽しんで帰った。

家に着いても俺は何故か恵梨奈という子が頭から離れなかった。俺が言うのも何だが、信広は遊び人だった。それは今も変わってなさそうだった。色んな女とやりたいというよくいるタイプだが、上手に騙せるタイプでもない。高校一年生で信広が初めての彼氏だそうだから、可哀相に思ったのかもしれない。そんなことを考えること自体、俺らしくないのだが…。

ピンポン。

誰だろう。急に家に来るタイプの彼女はいないはずだし、郵便もないはずだが…。

玄関を開けてみると、信広だった。

「よつ。」

カラオケ以来、信広とは何度か遊んだ。でも二人きりで遊んだことはなかった。いつもお互いの彼女と四人で遊んでいた。何より大学に入って一人暮らしを始めて以来、男が一人で訪れるのは初めてだった。

「信広じゃん。急にどうした？ まっ、入れよ。」

今日はバイトも休みで、もうすぐ前期も終わるので、溜まってい

たレポートをやる予定だった。正直、部屋に上げたくはなかったのだが、信広の暗い表情がそうさせた。

「適当に座つてろよ。缶コーヒーでいいだろ？」

「悪いな。」

冷蔵庫から缶コーヒーを持ってきて、手渡した。信広が一口飲むのを待つて聞いた。

「何かあつたんだろ？話せよ？」

「いや、たいしたことじゃないんだけどな……。」

お約束の台詞だった。俺は黙って先を促した。

「恵梨奈っているだろ？何か好きになつてきたんだよな……。」

「まじでっ！？へえ、あの信広がねえ……。付き合つて三ヶ月くらいだつたっけ？」

本心で驚いてしまった。昔の信広からは想像のできない言葉だった。昔から信広もどこか壊れた奴だった。親が海外で、兄が水泳のオリンピック候補だからかもしれない。そのせいか昔から気が合つた。ただ、心がざわついたのは驚いたからだろうか……。

「自分でも驚いてるよ。」

「で、のろけにきたわけ？」

わざと意地の悪い言い方をした。

「いや、そういうわけじゃないよ。困ることがあるんだよね…。」

「まさか他の女と別れる苦しみとか？」

言いづらそうなので、茶化して言った。

「アハハハ、一つは近いかな。勉強で忙しくなるし、どっちにしても女の数は減らす予定だったんだけど、問題は絢那なんだよね。」

「絢那って携帯の？」

「そう。絢那と別れると携帯が無くなるんだよね。」

絢那という女は信広が三年以上付き合っている、年上の彼女だ。そして、信広の家では何故か携帯を持たせてくれなかったので、それをプレゼントしてくれた女だ。しかも絢那名義なので、毎月の支払いもしてくれている。

「それはまじで痛いな。俺なら絢那だけは付き合つてくな。」

「歩らしいな。少し前までなら俺もそうしたかな。でも、今はしたくないんだよね。さすがに浪人中だし、これからは二股かける時間もないしな。」

信広が普通の男になったせいか、何故か少し苛ついてしまった。でもその感情はすぐに隠して聞いた。

「それなら仕方ないな。で、もう一つの方が本題なんだろう？」

「まあな…。それが恵梨奈のことなんだけど…。あいつの考え方がわかんないだよね。」

俺は黙って先を促した。

「俺って高校の時バーでバイトしてたって言ったよな？その時の先輩の影響かな、深く考えるのがアホらしくなったんだよな。でも恵梨奈はそうじゃなくて、そのせいであいつを追い込んでいつてる気がしてな…。好きなんだけど、俺じゃ無理かなって気もするんだよな。ってか、こんなこと考える自分が嫌なんだよな。」

そう言っただけ黙ってしまった。俺は煙草に火を付け、一口吸ってから答えた。

「具体的なことはわかんないけど、それでいいんじゃないか。相手の気持ちがあわかって、それが自分の気持ちと重なれば理想だけど、実際はそんなことばっかじゃないじゃん。そうじゃないのに、相手の気持ちに沿うだけなら、お前じゃなくてもいいじゃん。彼女だってそんなお前と一緒にいたいんだろうし、お前がわかりたいって気持ちを持ちさえすれば、それでいいんじゃないか？それこそ深く考えなくていいんじゃない？」

自分の言葉に吐き気がした。所詮人間なんて、自分のことしか考えていない。他人の気持ちの表面はわかってても、本当のところなんてわかるわけがない。本当の気持ちなんて、本人すらわかってないことが多いのに。それなのに、わがままとして価値なんてあるのか？その結果は決まっているのに。

「そんなもんかな？何か楽になったよ。」

俺のこんな言葉に満足してくれたらしい。それにまた吐き気がしたので、急いで煙草の火を消した。その後、くだらない話をして、しばらくして帰った。

「今日は急に悪かったな。レポート頑張ってな。」

「気にすんなよ。お前こそ色々頑張れよっ。じゃあな。」

俺の嫌いな言葉ランキングトップ5に入る、『頑張れ』という言葉を取り返した。時計を見ると、18時だった。かなり時間を取られてしまった。ただ、信広が帰った後も少し考えてしまった。恵梨奈という女のことを。信広を変えた女に興味を抱いた。自分でも驚いた。他人に興味を抱いたのは初めてだった。

ふと時計を見ると、19時だった。急いで晩飯を買いに行つて、レポートの続きをやろう。

今思えば、この時かもしれない。恵梨奈を意識したのは…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3034f/>

おはぎ

2010年10月19日18時09分発行